

パウル・クレーの絵画「ひとつの詩のはじまり」

石野 眞

Makoto ISHINO: A Study of Paul Klee's Painting "Anfang eines Gedichtes"

パウル・クレーは、故郷スイスのベルンで1938年に絵画作品「ひとつの詩のはじまり」を制作した。この作品は、現在スイスのベルン美術館に収蔵されている、魅力あふれるクレーの代表作である。本稿は若き日に詩人をも志した画家パウル・クレーの詩と絵画について、創作のあり方と創作活動の初兆を示す作品について考察する。

キーワード: Paul Klee Kunstmuseum Bern パウル・クレーの絵画 ポンピドー・センター国立近代美術館 ベルン美術館

I はじめに

本稿は若き日に詩人をも志し、音楽的才能にも恵まれながら美術の道に進み、ドイツのバウハウス教授として優れた講義ノートを刊行し、美術教育、造形教育に大きく貢献した教育者で画家パウル・クレーの継続研究である。

さきに、本学研究紀要に武満徹が若き日にパウル・クレーと音楽について、クレーの絵画「アド・マルギネム」を取り上げたことについて考察、研究した。続いて、この作品「周辺ニ描ク(アド・マルギネム)」の作品解説とパウル・クレー研究ノート断簡を本学研究紀要に研究ノートとして記した。パウル・クレーは、ナチスの迫害によりバウハウスの教授とデュッセルドルフの美術学校を追われてドイツを去り、故郷スイスのベルンで1938年に絵画作品「ひとつの詩のはじまり」を制作した。

本稿の題名の英訳には、スイスのベルン美術館でのパウル・クレー自身によるドイツ語の原題を用いる。また作品題名の訳語には、「詩のはじまり」などがあるが、筆者がかかわった「パウル・クレーの

芸術・PAUL KLEE PETROSPECTIVE」編集: 愛知県美術館・寺脇臨太郎/拜戸雅彦・山口県立美術館・斉藤郁夫。制作: 印象社。発行: 愛知県美術館・中日新聞社。1993年の題名「ひとつの詩のはじまり」としてこの研究と考察を進める。

II パウル・クレー

音楽によって結ばれた母と音楽教師の父を両親として、幼いころから音楽に親しみ、少年時代にベルン室内楽団でバイオリンを演奏、コンサートマスターをするほどの音楽的な才能に恵まれながら、美術の道を志そうとする青年期の悩みは、「クレーの日記」にてよく知られるところである。ピアニスト、リリー・シュトゥンプを妻としてクレーの生活はいつも音楽に満ち溢れていたという。パウル・クレーの表現世界には、そうした繊細で響きの豊かな線描と調和する色彩の広がる画面に、音楽性豊かな響きと調和が感じられる。クレーの作品を見る人は、ひたすらその美しく繊細な、音楽的な表現の中で熱い思いに浸りながら鑑賞の醍醐味を味わうことになる。見る人の心にほのぼのと迫ってくる作品をこれ

だけたくさん描いたこの時期のパウル・クレーの創作活動はまさに驚嘆に値する。パウル・クレーは1938年、この時期に実に多くの素晴らしい作品を郷里のベルンで制作している。

Ⅲ 「ひとつの詩のはじまり」

この作品は1938年、パウル・クレー58才、皮膚硬化症の最初の徴候のなかでの制作である。前年には、ブラックとピカソの訪問を受け、ニューヨークとパリの画廊で個展が開催された。パウル・クレーによる題名は「Anfang eines Gedichtes」で現在、スイスのベルン美術館所蔵である。筆者は1977年の在外研究員・スイス留学時代に多くのクレー自筆資料とともに鑑賞したが、近年日本でこの作品を鑑賞したのは1993年の「パウル・クレーの芸術・PAUL KULEE PETROSPECTIVE」展、愛知県美術館展後の山口県立美術館であった。この展覧会に際して、「パウル・クレーの芸術」山口展—織細で音楽的な響き」と題して平成5年2月、毎日新聞に拙文を掲載し、日本で広く親しまれているパウル・クレーファンのために鑑賞をすすめ、紹介した。

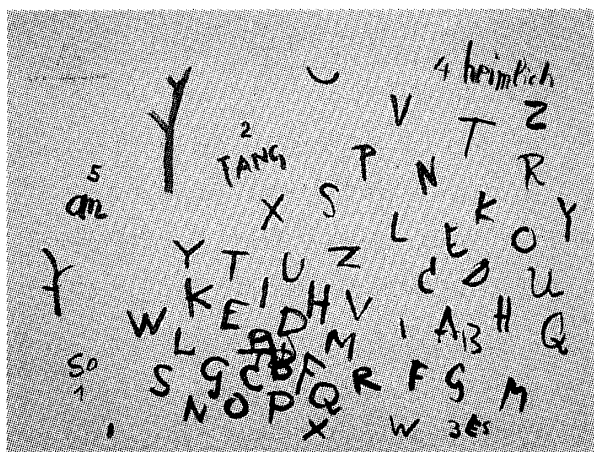
「ひとつの詩のはじまり」

この作品に表れる言葉と数字を見ると

1とSO

2とFANG

3とES



「ひとつの詩のはじまり」

4とheimlich

5とan.

そしてリズムカルに並ぶアルファベット、P・u・V・U・l・L・Q・F・g・H・O・S・D・Y・R・N・T・W……などである。

水彩の黒色によるモノクロームな表現は、深く静かに、そして密やかに私たちにつぶやくように語り掛ける。

線と記号の織り成すリズムカルなリズム

動き

しづかな躍動

蠢き

踊り

跳ねる

這う

繊細で情緒豊かな色調

クレーの作品は、音楽が人を魅了するのにも似た、不思議な力で私たちに語りかけてくる。

クレーの作品には、音に色彩があるように、色の中にも音が潜んでいるように思われる。

「教育スケッチブック」で語られるパウル・クレーの言葉と文法は、美術の言葉、造形の言葉—造形言語による造形思考として筆者の研究課題でもある。詩誌「ユリイカ」パウル・クレー特集・「パウル・クレーにおける詩と造形」には「クレーにおける詩的なもの—素描を中心に」と題された土肥美夫によるクレーの記号と文字の表現の優れた考察があるのでここに記す。

「クレーは、『軽い乾いた詩』（1938年）『形象文字の詩』1939年などにみられるように、記号や記号的図像のパターンを反復して構成した絵に『詩』という題名をつけている場合がある。このことと、1938年に数点描かれた純然たるアルファベットの文字絵が詩と関連づけられていることとは、明らかに密接な関係がある。たとえば、『壁画家のためのABC』には—いくつかの文字からすべてが生じた—と注記され、一見なんの変哲もなく無造作にアルファベットの26文字が描かれているにすぎない『詩

の始原』という作品には一ひそかにかく始まりぬ—
So fang es Heimlich—という5つの言葉が26文字に
まじって周辺に書かれている。これはどういうこと
なのであろうか。われわれは、いくつかの漢字につ
いて、その象形文字的起源をすでに知っている。そ
のような意味で、文字の生成と詩の起源とを原初的
に同一次元に還元したクレーの造形的思想の到達点
も理解できる。クレーは、このような思想を『詩の
始まり』のアルファベット絵で比喩的に示そうとし
たのではないだろうか。ここに、彼の全生涯にわた
る創造の比喩としての芸術の在り方が、もっとも単
純に、簡明に、暗示されているように思われる。」

5つの言葉が26文字にまじって周辺に書かれてい
る解題と文字の生成と詩の起源、そして絵画作品へ
の展開には、深い思索と造形思考への鋭いまなざし
が指摘され、パウル・クレーの尽きない魅力の秘密
を理解する。

IV 詩と詩人とパウル・クレー

詩人、金子光晴は、詩とは何かについて孔子を引
用して記している。

「詩は、志のおもむくところにて、心のうちにあ
るときはそれを志と言ひ、言葉に発したとき、それ
を詩と名づける。情がうちにうごいて言葉にあらわ
れるはじめは嘆声となるが、それでもなお不満足な
場合は、それをながく詩のかたちにして、のこすこ
とになる。

これは、支那で孔子が三千ものふるくからつたえ
られた諸国の詩を、三百編に厳選した最初のアンソ
ロジー『詩経』のなかの「関雎」の序に書かれた詩
の定義のようなもので、詩の発生を、要領よく説明
したものです」

パウル・クレーの作品は、いつも詩情豊かに、そ
して豊かな音楽性の響きわたる作品が多いが、金子
光晴の記す「詩は、志のおもむくところにて、心の
うちにあるときはそれを志と言ひ、言葉に発したと
き、それを詩と名づける」の詩を作品または、絵画

に代え、言葉に発したときに見て、感動したときと
して考察すると創作活動の秘密もまさにここにあり
と思われ、その深淵に迫れるように思う。

「詩は読むべからず。うたうべし」……と詩人、
谷川俊太郎は、若き日にこよなくクレーに魅せられ
てパウル・クレー展カタログに「クレーの詩」と題
している一文をよせている。この詩は、クレーの作
品に寄せる思いの丈を歌い上げているので、ここに
引用する。

在るもの

谷川俊太郎

クレーに寄す
かつてそれは
花と呼ばれた
しおれるまでの
短い時を
だが今
いつか無からにじみ出て
そこによみがえるものは
何か
ひとつの
魂の
輪郭の
なんという
過酷な曖昧
死と紙一重で

クレーの絵画に「詩」を感じない人はいないだろ
う。クレーの絵画が詩との強い親和力を持っている
だけでなく、彼がつけた絵画の題名もまた詩の断片
と言っていいものであり、それらはともに強い喚起
力に満ちていると谷川俊太郎は、パウル・クレーの
絵画に詩との強い親和力を持っていることを指摘
し、鑑賞する私たちも共感するところである。

パウル・クレー自身の詩作品について高橋文子
は、今まで明らかにされなかった多くの「クレーの
詩」100余編を紹介して、青年時代に多くの詩を書
き、詩集の刊行をも夢想しながら、やはり進む道は

画家であったクレーの創造の秘密と源泉を顕にしている。またその著書「クレーの詩」では、訳者の高橋文子によって、また随所に寄せられている新藤信の注記や巻末の編集ノートが新しいクレーの魅力語りかけている。

V パウル・クレー研究と作品の鑑賞

2003年の1月にロンドン大学のコートールド研究所で、クレー研究の資料を調査する機会を得た。コートールド研究所でのクレー研究の資料調査は2回目、時間もあって、ゆっくり滞在許可をいただいたので、貴重なクレー研究のほぼ全資料に目を通すことができた。

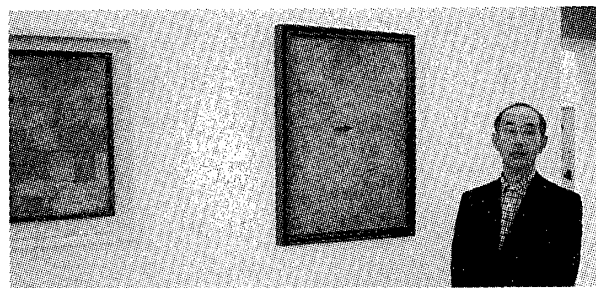
コートールド研究所クレー研究資料は、クレー作品を展覧会とカタログ、雑誌の掲載図版などを丁寧に年代順に整理したもので、ファイルは、現在も充実の途にある。

2002年秋のパリ、新装成ったポンピドー・センターでは、クレー作品の数々を鑑賞したが、続いて本年、9月17日より27日までの海外研修でパリのポンピドー・センター国立近代美術館の常設コレクションにおいて、クレーの作品

- 1 Pfeil im Garten, 1929
- 2 Hafen mit Segelschiffen, 1937
- 3 Florentinisches Villenviertel, 1926

を鑑賞、研究することができた。

日本でのクレー展は、度々開催されて盛況、好評の連続であるが、展覧作品のほとんどが、スイス国立ベルン美術館及びクレー家の収蔵品であるので、



ポンピドー・センター国立近代美術館にて

こうしたスイス以外の美術館の名作を鑑賞すると画家、クレーの魅力をいっそう深く理解することになり、カタログ、画集、図版では見ることが出来ない味わい深い表現の詳細を見ることが出来る。

また、2003年の秋にはニューヨークで美術とデザインの研究に従事する機会を得、ニューヨークのメトロポリタン美術館のパウル・クレーコレクションの展示室を鑑賞した。ここにも新たな充実した豊富なパウル・クレーの課題を見つけたように思う。

あらためて、クレーのことは・作品を美術展、評伝や画集に見ると読むたびに、見るたびにあたらしい感慨が沸き、広がり興味は尽きない。

カローラ・ギーディオ＝ヴェルガー著・宮下誠訳の証言と史料によるパウル・クレーの評伝では現代芸術の多くを疑いの目で見えていた人びとが彼、パウル・クレーにだけは好意的だったと指摘する。

「パウル・クレーという、多くの点で芸術上のひとつの特例というべき現象はまたその反響にも特別なかたちを喚起した。現代芸術の多くを疑いの目で見えていた人びとが彼にだけは好意的だった。クレー作品の根底にある人間的な部分が、その作品の個々の造形を理解し得ない観者にも、理解されるからだと考えるほか、このクレーと観者との幸福な結びつきを説明することはできない。おそらくクレーは、長い間埋もれていたさまざまな回想を呼ぶ覚ますことも心得ていた。それは、卓越した造形原理、あるいは独創性を持ってしてもそのままでは獲得されないものである。クレーの作品はかなり早い時期から何人かの識者によるすぐれた批評に恵まれていた」と記して、いまでも、ある意味では、依然として難解なクレー作品の鑑賞に多くの励ましを私たちに与えてくれる。

IV おわりに

本年、9月17日より27日までの海外研修でパリのポンピドー・センター国立近代美術館の常設コレクション、ルーブル美術館、オルセー美術館、ク

リューニー美術館を鑑賞、サンドニ大聖堂、シャルトル大聖堂を見て、ステンドグラスをはじめとする光と色彩が大きく広がる信仰と美術表現の素晴らしさに感動した。本稿をバリーにて擱筆、鳥取短期大学論集50号の記念に掲載できることをここに感謝し、このささやかなクレー研究がクレー研究ならびにパウル・クレーの愛好者に寄与することが出来れば幸いである。

参考文献・資料

- * 「クレー家秘蔵・パウル・クレー展」千足伸行監修・中日新聞社、1995・パウル・クレー展カタログ・223頁・クレーの「詩」谷川俊太郎。
 - * 「クレー」大岡信・新潮美術文庫50・1976年
 - * 「詩の本」詩の原理・8頁・西脇順三郎・金子光晴監修・筑摩書房・1967年
 - * 「クレーの詩」高橋文子訳・2004年・平凡社
 - * 詩誌「ユリイカ」パウル・クレー特集・「パウル・クレーにおける詩と造形」112頁・青土社1972・VOL. 4-7
 - * 「パウル・クレーの芸術」—その画法と技法と—西田秀穂著・東北大学出版会・2001年
 - * 「クレー」アート・ライブラリー・ダグラス・ホール著・前田富士男訳・西村書店・2002年
 - * 「ポール・クレー 芸術論 作品と生涯」勝見勝訳編著・三笠書房・1957年
 - * 「パウル・クレーの芸術・PAUL KULEE PET-ROSPLECTIVE」編集：愛知県美術館・寺脇臨太郎／拝戸雅彦・山口県立美術館・斉藤郁夫。制作：印象社。発行：愛知県美術館・中日新聞社。1993年
 - * 「時の流れのなかで」新カイエ・ド・クリティク・吉田秀和・読売新聞社・1994年
 - * 「教育スケッチブック」パウル・クレー著・利光功訳・バウハウス叢書2・中央公論美術出版1991年
 - * 「クレエ」ハーバート・リード著・片山敏彦訳・著・みすず書房・昭和29年・2月15日
 - * 「クレー」現代美術7・全10巻・第1回配本・片山敏彦解説・みすず書房・昭和34年12月
 - * 「クレー」現代世界美術全集・ヴァンタン・第13巻・中原佑介解説・集英社・1971年
 - * 「パウル・クレー」フェリックス・クレー著・矢内原伊作・土肥美夫訳・みすず書房・昭和37年・5月10日
 - * 「抽象絵画の誕生」土肥美夫著・白水社・1984年7月15日
 - * 「近代絵画の見かた」ゲオルグ・シュミット著・中村二柄訳・現代教養文庫337・社会思想社・1961
- 石野眞 パウル・クレー研究—論文等
- * 「Paul Kleeの“Padagogisches Skizzenbuch”について」—昭和47年12月・島根大学教育学部紀要・第6巻（人文・社会科学編）
 - * 「パウル・クレーの造形思考」—平成6年3月・島根大学教育学部紀要・第12巻（人文・社会科学編）
 - * 「パウル・クレーの造形思考」—昭和52年12月・島根大学教育学部紀要・第12巻（人文・社会科学編）
 - * 平成9年の島根大学教育学部紀要「パウル・クレーのプリミティブ」
 - * 「武満徹のパウル・クレー絵画と音楽」—平成13年3月・島根大学教育学部紀要・第34巻（人文／社会科学編）
 - * 「パウル・クレーの絵画『アド・アドマルギネム』と武満徹」2003年12月・鳥取短期大学研究紀要・第48号
 - * 「パウル・クレーの絵画」研究ノート・2004年6月・鳥取短期大学研究紀要・第49号
- ☆
- * 「没後50年記念パウル・クレー展—1890年から1920年代へ」千足伸行監修・産経新聞社事業局編集・印象社制作・産経新聞社。1989年
 - * 「パウル・クレーの芸術・PAUL KULEE PET-

ROSPECTIV]

Paul Klee Retrospective

Directed by Josef HELFENSTEIN, Paul Klee-Stiftung, Kunstmuseum Bern, Bern

Curated by Rintaro TERAKADO, Aichi Prefectural Museum of Art

Masahiko HAITO, Aichi Prefectural Museum of Art

Ikuo SAITO, The Yamaguchi Prefectural Museum of Art

Contribution by Alexander KLEE with assistance of Makoto ISHINO

編集：愛知県美術館・寺脇臨太郎／拝戸雅彦・山口
県立美術館・齊藤郁夫。制作：印象社。

発行：愛知県美術館・中日新聞社。1993年

☆

- * 「パウル・クレーの芸術」山口展—繊細で音楽的な響き・平成5年2月・毎日新聞
- * 「こどもたちのためのパウル・クレー展に寄せて」山陰中央新報／平成9年1月8日。
- * 「パウル・クレー美術館に期待」石野眞・中国新聞社・夕刊コラム「でるた」／平成12年6月15日。
- * 「私のパウル・クレー研究」潮流・日本海新聞・平成15年5月16日